

言語景観 —— 拡がりつつある世界の景観

Linguistic Landscape – Expanding the Scenery

Elana Shohamy & Durk Gorter (eds.)/2009 Routledge

藤田ラウンド 幸世 FUJITA-ROUND, Sachiyo

● 国際基督教大学教育研究所

Institute for Educational Research and Service, International Christian University

2010年9月に行われた第18回社会言語学シンポジウム（於イギリス・サウサンプトン大学）の一つのパネル発表が、‘Signs in context: multilingual texts in semiotic space 文脈の中の記号：記号論的空間における多言語テキスト’という「言語景観」に関するものであった。エストニア、台湾、エチオピア、南アフリカ、フィンランド、それぞれの国の公共標識、看板や広告、観光スポットでの多言語の状況を通してグローバリゼーションの拡がりとも受け取れる言語景観を見ることができた。一方で、多言語状況の可視化だけではなく、多言語に拡がるだけではない、逆の軸、つまり二言語使用という前提がありながら、一言語が優位に立つ状況を映し出した言語景観もあった。二言語使用が定着したと考えられているカナダのモンリオール（フランス語と英語）やベルギーのブリュッセル（フランス語とフラマン語）の言語景観である。

本書は、発展途上にある言語景観研究において、今後の方向性を左右する可能性を持つ。これまでにない、32ページに亘るカラーページの言語景観は圧巻であり、28名の著者による、5部編成の20章は世界各地を広くカバーするものである。

本書の意図は、編者のShohamy & Gorterによると言語景観の「景観の拡張」を強調することにあるという。先行研究を越え、これまで以上に言語景

観の広く、多様な見方を紹介し、十分な問題提起を巻き起こし、また、いくつかの回答と、実際の調査とデータに基づくガイドとなりうる仮説を提供するとある（p.3）。以下、各章を短くまとめる。

第一部、理論化にむけた展望では、「Linguistic Landscaping and the Seed of the Public Sphere 言語景観と公共圏の起源」の歴史的アプローチの言語景観である。ハムラビ法典、ロゼッタ・ストーン、ベヒストゥーン、「メネテケル」の警告、タージ・マハルの碑文を例に、ハバーマスの「公共圏」と書く行為（writing）に焦点を当てている。Coulmasの論点は、誰がこうした記号を読むことができ、誰が読んでいるのかといったreadership（読み手）に集約され、読み手の権限と公共の場、ひいては創る側の動機や意図も視野に入ってくる。

Spolskyの「Prolegomena to a Sociolinguistic Theory of Public Signage 公共における記号の社会言語学理論に向けた序論」では、言語景観に関わる要素を一つ一つ分解し、改めて何を究めるのかを問うている。1979年からの自らの研究の動機や興味、研究上の問題点などを具体的に振り返り、Spolsky & Cooper (1991) のイスラエル旧市街の言語景観研究を含む、既存の言語景観研究に対する論評を批判的に行い、今後の理論の整備のために何が必要かを提起している。公共の標識とリテラ

シー（識字）の問題、公共の記号の中の媒介者、記号の数値化といった先行研究から3つの問題点を導き出した。

Ben-Rafaelの「A Sociological Approach to the Study of Linguistic Landscapes 言語景観研究に対する社会学的アプローチ」は、ハバーマスの公共空間と、言語景観で用いられる「公共空間（public space）」の関わり、また、社会学からデュルケム、ブルデューらの援用、さらに“gestalt（異なる現象と思われるものでも、全体性を持ったまとまりのある構造のことを指す）”という、構造がいかに構成されているかという概念を言語景観に応用することを提起している。Cenoz & Gorterの「Language Economy and Linguistic Landscape 言語の経済性と言語景観」は、言語景観の中に多く現れる「広告」から発信されるメッセージと経済性の関わりを考察している。中でも、言語と経済学という分野に注目し、経済評価法の言語景観への応用を試みた。Huebnerの「A Framework for the Linguistic Analysis of Linguistic Landscapes 言語景観の言語分析のための理論枠組み」では、言語景観にみられる言語の選別、類別、言語の人為産物の言語分析の問題に焦点をあて、コミュニケーションの民族誌を提唱した社会言語学者のハイムズのSPEAKINGモデルを一つの枠組みの援用として提起した。Hultの「Language Ecology and Linguistic Landscape Analysis 言語生態学と言語景観分析」は、Haugenから始まったLanguage Ecology（言語生態学）の系譜を追いながらも、研究方法として、コミュニケーションの民族誌、相互行為の社会言語学、そして批判的ディスコース分析を組み合わせたnexus analysis（Scollon & Scollon, 2004）の援用を提案する。

第二部、方法論にむけた課題では、アメリカ・オークランドの韓国系アメリカ人のビジネスオーナーへのインタビュー調査と韓国語が表出される韓国系アメリカ人オーナーの店のフィールドワークから考察する、Malinowskiの「Authorship in the Linguistic Landscape 言語景観の中の発信者」から始まる。韓国語のハングル文字がなぜ表出されるのか、その発信者の声が具体的に分析され、エス

ノグラフィーという方法による情報やマルティモダル（複数の形式）の分析が、象徴性や指標性の意味を読み解く鍵となるのではないかと示唆する。Barni & Bagnaの「A Mapping Technique and the Linguistic Landscape マッピング手法と言語景観」では、外国語としてのイタリア語を学ぶセンターによって開発された手法を紹介している。ここでは、言語景観はイタリア語の言語の状況をモニターする一つのアプローチとして考えられている。調査者がデジタルカメラで写真をとると、センターで開発されたMapGeoLing 1.0.1と名付けられたソフトウェア上の地図に、その写真はマークされ、写真に関わる記録も整理される。イタリア語を学ぶ学習者一人一人の言語に関わるデータ、画像データ、フィールドデータ、地図などを入力するとこのソフトウェア上で、マクロやミクロの多様なレベルでの分析が可能になるという。また、Edelmanの「What's in a Name? 名前の中に何がある？」の中では、特有の言語を使う事の機能、広告における固有名詞の役割、そして言語景観に焦点をあてられている。多言語景観の分析をするときに、記号としての文字だけではなく、固有名詞という特定された言語としての機能を考えることで、分析の範囲や単位に注意を払う必要があるだろうとまとめている。

第三部、言語政策からのアプローチと第四部、アイデンティティと意識では、各章が独立した内容になっている。Backhausの「Rules and Regulations in Linguistic Landscaping 言語景観の中に映る規則と法規」では、カナダのケベック州と日本の東京における言語に関わる法規の事例を比較している。Slobodaの「State Ideology and Linguistic Landscape ステート・イデオロギーと言語景観」は、ベラルーシ、チェコ、スロバキアの3カ国の多言語景観の比較をし、ローカルとグローバルの中間地点としてのstateステートにおけるイデオロギーを模索した。Lanza & Woldemariamの「Language Ideology and Linguistic Landscape 言語のイデオロギーと言語景観」では、エチオピアの地方都市（Tigray）での現地語（Tigrinya）と公用語（アムハラ語）、また国際語の英語がどのように言

語景観に表出しているかを調査した。Dal Negroの「Local Policy Modeling the Linguistic Landscape 言語景観を形作る地域施策」では、イタリア北部、南チロルにあたる地域で、ドイツ語、チロル・ドイツ語、イタリア語が施策としてどのように言語景観に現れているかを調査した。Curtinの「Languages on Display ディスプレイ上の言語たち」は、台湾における言語のアイデンティティと言語の指標性について、エスノグラフィーとディスコース分析から中国語の簡体字・繁体字表記、ローマ字表記、英語、フランス語、日本語の指標性を言語景観から考察する。Trumper-Hechtの「Constructing National Identity in Mixed Cities in Israel イスラエルの混合地域内で国のアイデンティティを構築する」ではユダヤ人とアラブ人の混合地域の公共空間に表れる言語景観と国家アイデンティティの関わりを設問とし、ナザレ北部の調査を行った。Dagenais, Moore, Sabatier, Lamarre & Armandの「Linguistic Landscape and Language Awareness 言語景観と言語意識」は、教育現場で言語景観を授業の教授法として応用をした。カナダの二つの都市で行った小学校の長期に亘る調査が説得力を持つ。Kallenの「Tourism and Representation in the Irish Linguistic Landscape アイルランドの言語景観に見られるツーリズムと表象」では、アイルランド共和国と北アイルランドからそれぞれ2つの都市を選び、質的・量的の両面から調査を行った。その上でツーリズムと公共のディスコース分析のアプローチで分析をしたものである。

第五部、今後の展開と方向性では、Hanauerの「Science and the Linguistic Landscape 科学と言語景観」で、微生物学の実験室、廊下、事務所、台所の4カ所で見つけられる目に見える表象がジャンルごとに分けられた。貼り付けることができるノート、警告標識、ポスター、落書きなど、壁に書かれ、貼られた記号を取り上げる。これまでの多言語や広告、また公共の場としての屋外ではない、新たなジャンルに関わる研究といえる。「Linguistic Landscape and the Transgressive Semiotics of Graffiti 言語景観と公共違反とみなされやすい落書きという記号」で、Pennycookは、公共の場

に書かれた落書き、不法のもとで書く行為と描く行為のプロセスに着眼する。落書きが提起することはいくつもあるが、例えば、新たな言語景観として社会への統合、アイデンティティ、想像力、発話内行為、説明要求といったことに新たな光をあてることになるという。Shohamy & Waksmanの「Linguistic Landscape as an Ecological Arena 言語景観とエコロジーの領域」では、本書で挙げてきた言語景観の数々の特徴を、移り変わる公共空間の中のテキスト（記号）、公共空間の中における意味の構築、公共空間の中の交渉と立脚点、活動の空間、教育としてのテキスト（記号）としてまとめている。最後に「それゆえに、私たちは、言語景観の現状の概念に対して、今よりもさらに流動的な、少しゆがみのある境界線を置くことで挑戦しようと考えている。移り行く公共空間のなかに表れるすべてのあらゆるディスコースを可視化するために (p.328)」と、公共空間の中の「言語」への思いを語る。

本書と題名を同じくする、庄司・バックハウス・クルマス（2009）らの『日本の言語景観』の中には、クルマスとバックハウスも日本語で寄稿している。Shohamy & Gorter（2009）と庄司他（2009）の二冊は、相互補完的に言語景観を拡げるものだろう。しかし、近代の都市特有の「凝縮した塊（agglomeration）（Landry and Bourhis, 1997）」をどう読み解くかは、この二冊を読むだけでは十分ではない。社会言語学の中で、言語景観がどのように拡がるのか、今後を見極めていきたい。

- 庄司博史、ベート・バックハウス、フロリアン・クルマス 編著（2009）.『日本の言語景観』三元社
- Sebba, M. & Zabrodskaia, A. (Chairs) (2010). 'Signs in context: multilingual texts in semiotic space', in The Abstracts of Sociolinguistic Symposium 18: Negotiating transnational space and multilingual encounters, University of Southampton, 1-4 September 2010, pp.141-145.
- Landry, R. & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, pp. 23-49.